令和３年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

Ⅰ　スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
Ⅱ　マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
Ⅲ　スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
Ⅳ　日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
Ⅴ　スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【　茨城県　】

学校名【　茨城県立水戸聾学校　】

１ 実践テーマ	Ⅲ・Ⅴ
２ 実施対象者 （学 年・人 数）	・中学部　２０名 ・高等部　２１名
３ 展開の形式	（１）学校における活動 ① 教科名（　保健体育　） ② 行事名（　　） ③ その他（　　） （２）地域における活動 ① イベント名（　　） ② その他　（　　）
４ 目　標 （ねらい）	・パラリンピアンの体験談を通して、目標をもつことや努力すること、人との関わりの大切さを学び、学校生活に生かす。 ・他種別の障がいについての理解と共生社会の在り方や今後の生き方について考える機会とする。
５ 取組内容	１．事前学習 （１）講師紹介 ・若山　英史選手[車いすラグビー] 東京 2020 パラリンピック　車いすラグビー３位 ・川村　怜選手［ブラインドサッカー］ 東京 2020 パラリンピック　ブラインドサッカー５位 ・岩渕　幸洋選手［卓球］ 東京 2020 パラリンピック 代表選手団騎手、パラ卓球出場、 2018 年パラ卓球世界選手権３位 ・橋本一郎先生 亜細亜大学経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科 客員准教授 （２）体験学習 ①車いすラグビー ・車いす移動、車いすに進みながらのボールキャッチやパス体験 ・椅子に座った状態のパス体験

②卓球
- 片足を使わないでプレーする体験
- 椅子に座った状態でプレーする体験

③ブラインドサッカー
- 見えない状況でボールを蹴る、ドリブルからシュート、ゴールキーパー体験

2．講演会　～パラリンピアン・大学教授との交流会～
⑴実施日　令和３年 12 月２１日（月）13:10～15:20
⑵内　容　・自己紹介、パラリンピックまでの体験談
・聴覚障がいへの向き合い方
・質問形式のディスカッション

3．講演会の感想記入
4．講演会について学校ブログに掲載
5．卓球の道具を授業、部活動で活用

６ 主な成果	・障がい種が違う３人全員が、明るく前向きで、人を引き付ける力が満ち溢れていたことに感動するとともに、それぞれの障がいやスポーツの特性や魅力を理解できた。 ・障がいというハンディがあるからできないと考えるのではなく、今、自分に出来る最大限の事を日々追求すること、失敗や挫折をした時の悔しい気持ちを忘れず、苦しくても努力を継続すること、おごりがあってはいけないこと、夢ややりたいことは、あきらめずもち続ければ、輝ける場所を見つけられること等の精神論を説いていただいた。生徒は、自分の甘さに気付き、見つめ直す機会を作れたとともに、未来への希望や勇気をもつことができた。 ・講師の皆さんから、パラスポーツに挑戦することで人との関わりが広がり、その経験から自己形成につながるという話をいただいた。また、常に多くの人に支えられていることに感謝する大切さや、人間関係の構築の大切さを改めて感じ取ることができた。 ・聴覚障がいへの向き合い方について知ることで、生徒自身も自身の障がいや苦手とすることについて考え、これからの夢や目標に向けてどのように努力するか考えることができた。
７ 実践において工夫した点（事業の特色）	・講演会を実施する前に、パラリンピアンと実施競技の紹介や体験学習を取り入れることで、興味・関心を高められるようにした。 ・事前に質問事項を提出し、限られた時間で多くの質問に答えていただけるようにした。 ・聴覚障がいや視覚障がいなど様々な方との交流だったため、事前に打ち合わせを行い、コミュニケーションが円滑にとれるよう、話すときのルールを決めて行った。 ・リモートであることを生かし、霞ヶ浦聾学校も共同で取り組むことができた。
８ 主な課題等	・新型コロナウイルス感染症対策として、リモートによる実施だったため、直接的な交流ができなかった。 ・事前学習の各競技体験では、専門の道具の準備が難しく、本物の道具に触れられるとよかった。 ・パラリンピアン３名との交流実施が決定した際、学校行事との調整が難しく、２ 時間程度の時間しか確保できなかった。もっと時間があれば、より深い学びにつながったのではないかと感じた。
９ 来年度以降の実施予定	・今回の学習を通して学んだことを、今後の学校生活や人生に生かしていけるよう支援していきたい。 ・今後も講師の方々と、可能な限り交流を継続しながら、共生社会の形成に向けて取り組んでいきたい。